



平坦な天竜川原に広がる河原地区。水田地帯のところどころに、今も養殖池が見られる。

座光寺 19 地区  
の中で4番目に広  
い面積をもつ河原  
地区は、豊かな水  
田が広がる米どころ。しかし戦前から戦後し  
ばらくは、土地条件の悪い湿田地帯でした。天  
竜河畔一帯は松林が茂る荒れ地で、今とよ  
な解放感はなかつたといいます。

戦時中、食糧増産に迫られ、この湿田の排  
水事業が村をあげて行われました。水害に備  
えた川除（堤防）の歴史は江戸時代にまでさ  
かのぼります。一方、豊富な水を利用した養  
鯉業が、かつては大規模に行われていました。

麻績の里 座光寺便 河原号  
平成28年3月 発行 ■ 麻績の里ふるさと応援俱楽部・飯田市役所座光寺自治振興センター内 長野県飯田市座光寺25335 TEL 0265-122-1401

石柱が周囲に据えられた  
舞台校舎



ことになつたので  
す。元善光寺の本  
多秀道副住職は、  
「石が再び生きる  
ことになり、とても  
ありがとうございます。」  
と話しています。

昨年の御開帳に合わせ、元善光寺では  
平成26年11月から、山門前の石段を全面  
改修しました。記録では、山門前の石段  
56段が天保14年（1843）の造成、山門  
上の20段が明治22年（1889）の造成と  
されています。

記されています。これらの古い石段は長い  
もので3メートル、短いのでも1メートル  
近くもあります。重機のない時代に、これ  
らを切り出し、加工し、運んで設置した労  
力は相当なものだったはず。お寺に寄せる  
昔の人々の思いが伝わってきます。

役割を終えた古い石柱は、これまで伊  
那市の古刹・仲仙寺や近在の寺院で一部  
が再利用されました。そしてこのほど、麻  
績学校校舎（舞台校舎）の外柵の土台に  
この石柱が使われることになりました。寺  
院以外での再利用は初めてのことです。

工事は今月（3月）で終了し、校舎周辺  
は新しい景観に生まれ変わりました。古刹  
の石段を支えてきた石柱が、再び舞台校  
舎の一部を支える

**ふるさとパック  
春の味覚満載便  
2,000円（送料別）**

お申し込み先 座光寺自治振興センター内  
麻績の里ふるさと応援俱楽部  
(TEL.0265-22-1401・FAX.0265-22-1475)  
E-mail:zakouji@city.iida.nagano.jp

- お申し込み締切 平成28年4月20日
- お届け時期 平成28年4月末
- ※代金は商品到着後にお支払いください。

石が再び生きることを願つて

六災害後は、止水養鯉という専用池での養殖に変わります。稚魚を2年間飼い、その後流水池へ移して半年ほど育て、およそ2年半で出荷しました。最盛期は昭和40年代中ごろで、年間15トンも出荷する養鯉家もありました。

鯉が下降になると、代わって鰻や鮎の養殖も一時行われました。また昭和40年代末には金魚の養殖も起きました。金魚はきれいな水と高度な技術が必要とされ、現在は湧水を利用した池で育てられています。



堤防とカスミ



### 【堤防とカスミ】

カスミとは遊水地のことです。大洪水で増水した水をいったん水田地帯に溜め、川の水量が減少したとき本流に戻すために、天竜川支流の河口（南大島川出口、外堤防と内堤防の間にカスミ口が設けられています）

### 【河原訪ね歩き】

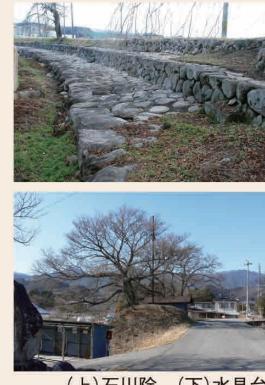
**市田村（高森町）と座光寺村の境を示す目印です。かつては名前とのおり2本の松がありましたが、現在は1本を残すのみです。**



二本松

### 【二本松】

石川除には田に水を引くための水門も設けられています。水見台は周囲より少し高くなつたところに設けられ、半鐘が設置されています。



### 【石川除・水見台】

清水が豊富な一帯はホタルが身を隠す草むらがあり、ホタルの生息にもホタル観察にも理想的な環境です。



ホタルの自生地

### 【白山下のホタル自生地】



二本松

## 内井と養鯉業

河原地区を流れる井水（内井）は、水源を天竜川にとっています。この内井も昭和36年の三六灾害では大きな被害に遭いました。

災害後、復旧に向けた工事が伊那谷各地で進められました。このとき、井水の復旧に内井は当初入っていませんでした。「市田天竜井から二本松を通って黒沢川へ」が最初の計画だったのです。これを当時の地区的役員が県の技師にお願いして、内井の復旧に変えてもらいました。

座光寺の養鯉業、特に河原地区の養鯉業にとって、内井は必要不可欠なものでした。内井の改修がかなったことで、河原地区的養鯉業は救われ、その後最盛期を迎えることになります。



河原地区をうるおす内井



治水の碑

天竜川と堤防

### 産業の変遷

戦後の昭和24年、河原地区には30戸ほどの人々が生活していました。米と養蚕が当時の主力でしたが、養蚕は既に斜陽期に入っていました。米は増産が求められる時代で、河原の広い耕地は開拓の余地を残していました。座光寺に養鯉業が起るのは江戸末期です。明治に入ると養蚕業が盛んになり、そのサナギを飼料に自家飼いが流行します。稚魚を水田に放し、秋に成長したものを探り、これを数年繰り返す飼育法でした。昭和36年の三

河は「暴れ天竜」といわれるほど、昔から氾濫を繰り返していました。このため村人は資金を出し合いで、天保2年（1831年）、石積みの堅牢な堤防を完成させました。長さ231メートルにわたるこの堤防が、飯田市の史跡に指定される「石川除（いしかわよけ）」です。その後も堤防は延伸されてきました。明治20～30年代（1888～1906）にかけて、石川除に続く内堤防、さらに外堤防が完成しました。その後もより安全な堤防造成への努力が続けられてきました。かつての堤防跡や石川除水神前の「治水の碑」が、先人の努力と水防の長い歴史を今に伝えています。

### 洪水との戦い